

東アジア金融事情 現地調査報告

北陸大学未来創造学部教授
金澤 泉

- (1) 調査期間:2006年8月28日～9月3日(7日間)
- (2) 調査地:シンガポール、香港
- (3) 訪問先:三菱東京UFJ銀行シンガポール支店、JETROシンガポール、NHテクノグラスシンガポール、シンガポール大学ビジネススクール、ウシオ電機香港有限公司、香港証券取引所、三菱東京UFJ銀行香港支店、香港金融庁、香港大学
- (4) 参加メンバー:学生10名(中国人留学生8名、日本人学生2名)、教員2名、職員2名、計14名

1. 背景

北陸大学東アジア総合研究所の第1回目の海外研修プログラムとして、香港、シンガポールにて金融にテーマを絞った調査団を派遣することとなった。本学としては今まで、中国、韓国、台湾、ロシア、モンゴル、ドイツなど主にアジアを中心に主に本学の学生を対象とした海外研修を実施してきたが、今回は初めて香港とシンガポールに派遣することとなった。本件を企画提案し、引率責任者となった私にとっては30年間に亘る銀行勤務経験を少しでも学生に伝え、金融の面白さを理解してもらう絶好の機会となった。また、銀行時代には北京、台北、香港などの中国圏での勤務経験も持っており、その意味でも私にとっては過去に蓄積したノウハウ、人脈などを発揮出来るプログラムでもあった。

校内の学生選抜において私が重視したのは、第一に語学力、特に英語力であった。香港、シンガポールでの公用語はなんと言っても英語であるし、英語でのコミュニケーションが出来なければ、調査目的を達成することは困難であった。出発前に学生には帰国後の報告書の提出に加えて、いずれの訪問先でも必ず学生による英語か日本語による訪問先との聞き取り調査を義務づけた。幸いにも本プログラムへの参加希望学生は33名を数え、英語と日本語のレベルが極めて高い学生を選抜することが出来た。その結果、訪問先での聞き取り調査には全く支障が無く、学生からの積極的な質問も多く、訪問先との間で活発な意見交換が出来た。

一方、選抜された学生の構成としては4年生6名、3年生4名と比較的年次が高い学生が多かったが、金融論、国際金融論および貿易論などの金融関連科目については未履修の学生が多く、金融全般には漠然とした興味を有しているが、殆ど学習が進んでいない状況であった。

当初、私は国際金融を担当する教師としての今回の調査の目的は以下の3点だと考えていた。

- ①アジア通貨危機以降の香港、シンガポール市場の変化
- ②最近の中国企業の国際的なマーケットでの資金調達にあたり、香港やシンガポール市場の果たしている役割
- ③香港市場及びシンガポール市場間での競争と台頭する中国の上海、深圳市場などとの競争

しかしながら、上記の如く、学生の金融に対する理解が不十分であったこと、また、香港、シンガポールへ訪問した経験のある学生もわずか1名であったことから、当初私が考えていた調査目的を簡略化し、金融、特に外国為替についての基礎知識の習得と香港市場とシンガポール市場についての特徴を理解してもらうこととした。実際に5回に亘る事前勉強会では、外国為替相場、金融市場、株式市場などの基本的事項の説明に終始した。

現地での調査においても、あくまで参加学生が自分で勉強した中で興味を持った点について訪問先で自由に提起し、質問することを期待した。



シンガポール大学ビジネススクールのキャンパスにて

2. シンガポール

今回、シンガポールを訪問するにあたり、その直前に所謂「村上ファンド」がシンガポールに拠点を移し、積極的な資金運用を行い、そのような動きも一因となり、シンガポールでの資産運用残高が急増しているとの新聞報道がされた。この点については多くの学生も興味を持っており、特に三菱東京UFJ銀行シンガポール支店を訪問したときにも話題にものぼった。実態としては日本からのファンドによる資金だけでなく、中近東のオイルマネーやスイスからのプライベートバンクの資金がシンガポールに多く流入していて、シンガポールでのオフショア市場は活発化しており、東京、香港と並ぶアジアのオフショアセンターの地位を確立していた。また、従来香港にて運用されていた華僑資金が中国に返還された香港を嫌い、守秘義務では厳格なシンガポール市場へシフトしているとの情報も印象に残った。

シンガポール市場は香港市場と異なり、オフショア市場と国内銀行勘定を厳格に区別する内外分離型市場で、どちらかというロンドン市場や香港市場とは異なり、ニューヨーク市場に似ていると言われている。そのような考えがシンガポールドルの非国際化政策に具現化されており、そのおかげで、1997年のアジア通貨危機の時に一定の効果があったものと言われている。しかし最近になり段階的にそのような非国際化政策も緩和されてきた。常にシンガポール金融当局は香港金融当局を意識しており、今後も両市場は良きライバルとして発展していくものと思われる。一方、発展著しい中国、その象徴である上海市場の発展はシンガポール市場や香港市場にどのような影響を与えるのかは今後注視すべき課題であろう。香港市場の場合には中国の発展による恩恵を大きく受けており、中国の窓口と誰でも位置づけている。シンガポールの場合はASEANやインドの窓口と意識しているが、その関係は中国と香港ほど緊密なものではない。また、日本企業に顕著に見られるように、ASEANから中国へと投資の流れが変わっており、相対的に中国の地位が上がり、ASEANが下がっている。それが特にアジア通貨危機以降、シンガポール市場の成長力鈍化にも繋がっている。

JETROを訪問したときの説明ではシンガポールというと、金融市場であり、金融サービス業の比重が圧倒的に高いと思っていたが、付加価値ベースではエレクトロニクスやバイオ医療などの製造業が約26%と日本より高く、一方金融サービス業は10%前後にすぎないとの説明は意外な気がした。

やはりそれはシンガポール政府の製造業重視の産業政策や明確なプライオリティー付けによる特定分野の育成方針などの賜物であろう。シンガポールは国内市場規模が小さく、輸出依存の経済であることは当然だが、それは国外事情によって大きくシンガポール全体の成長に影響を及ぼすという宿命がある。しかし、そのようなハンディを乗り越え、新産業基盤の強化に向けて、例えばアジアにおける知的財産関連ビジネスのハブを目指したり、ASEAN、インド、オセアニアを含めた地域統括会社の誘致実績を挙げていることは本当に感銘を受けたし、将来、日本が進むべき道の参考にもなると感じた。

シンガポール滞在中のみならず、今回の全調査期間中、参加者全員にとって最も印象に残ったことはなんと言っても、シンガポール大学ビジネススクールとの交流であった。本学にとって全く初めての訪問にも拘らず、シンガポール大学キャンパスツアー、大学紹介ビデオ、学生との交流、討論会、シンガポール金融市場についての教員の講義、立食ティーパーティーなど、すべてが周到に準備され、しかも通り一遍のものではなく、本当に心のこもった受け入れであった。

当初、シンガポール大学はアジアの中でも、東京大学、北京大学、香港大学などと並ぶ名門校でもあり、私自身、多少気後れした点もあったが、全く予想外の温かいもてなしであった。私が奉職する北陸大学もシンガポール大学同様、国際的な大学で、海外からの訪問者も多いが、どこの国のどこの大学との交流においても、シンガポール大学で受けたようなもてなしの心を持って接することが出来るように心がけたいものだ。



NHテクノグラスシンガポールでの研修風景

3. 香港

香港に到着したのはもう夜中だったが、大型バスで高速道路に乗って闇夜に光り輝くカオルーン地区や香港島に向かって走っていくのは何回経験しても本当に期待で心がわくわくする。私自身、本学で教鞭をとる前、都市銀行に勤務中、2年間の香港駐在経験があり、その後も出張や観光で何度も足を運んできたが、その都度、同じような気持ちになる。学生たちも私以上に初めての香港に興奮したようで、香港滞在の3日間、調査訪問以外のビクトリアピークでの夜景、ショッピングモールでの買い物、などの観光スケジュールを存分に楽しんでいた。

香港地区ではウシオ電機(牛尾香港有限公司)を訪問し、香港の金融事情について日系メーカーとしての立場からの意見を聞いた。同社の場合は中国本土に工場を2ヶ所所有し、香港のオフィスは本社と物流拠点としての機能に特化していた。また、そのほかに上海にも営業拠点を開設している。香港に本社を設けているメリットとしては、情報、ロジスティックス、アクセス、金融などの自由と利便性、低い税率などがあるとの説明であったが、同社に限らず、多くの日系企業はこのようなメリットから香港に拠点を有している。やはり香港と中国は切り離せない関係にあり、香港の人たちが心配しているように、上海が香港にとってかわるのには今後相当長い時間がかかるであろう。恐らく、その間ウシオ電機のように、香港は本社や金融機能、上海は中国国内営業統括拠点として位置づけられ、両都市ともに競争しながらも発展していくものと確信した。学生たちが最も驚いたことは、やはり法人税率の低さ(17.5%)にあった。日本の場合には現在、法人税は実効税率が約40%で、経済活性化の為に法人課税を低くする方向で見直ししようという動きがある。たとえそれが実現したとしても香港の場合は日本に比較してまだ桁違いの税率の低さに日本人学生のみならず中国人留学生にとっても衝撃的であり(中国の企業所得税率は33%)、そのような税率にも拘らず、何故香港では税収不足に陥らずに繁栄を継続してきたかについて、素朴な疑問を提起した。私自身苦勞しながらそれに返答しつつも、税率だけでなく、伝統的に政府の関与を嫌い、自由なビジネス環境こそが香港の繁栄の基礎となっていることを再認識した。

1978年末の改革開放路線に伴い、中国は社会主義市場経済により最近では毎年10%前後の成長を続

けており、多くの日本企業も13億人の中国マーケットに吸い寄せられている。一方で日本も2001年の小泉内閣成立以降やっとバブル経済崩壊後の低迷から抜け出し、「小さな政府」、「官から民へ」を合言葉に構造改革を進め、効率的な政府の実現に努力している。その流れの中で改めて香港の繁栄を目にして、1億2千万人の日本と6百万人の香港では前提条件が異なるものの、謙虚に香港に学び、経済格差を恐れず小さく効率的な政府を実現し、自由でフェアな競争により形成される民間の充実しか日本の進むべき道は無いと確信した。

三菱東京UFJ銀行香港支店を訪問したとき、ディーリングルームの見学の後、中国マクロ経済の現状と香港の課題についてブリーフィングを受けた。特に印象に残ったのは、中国が高度成長を続けていく中で、香港が将来を先取りして、中国にとっての香港拠点の活用を模索している点であった。香港の優位性とはシンガポールと同様に、自由な金融市場、税制面でのメリット、中国本土と隣接しており、中国取引の窓口機能を果たしている点などである。しかし、中国自身が高い経済成長を遂げるにつれて、香港の市場環境の優位性が以前ほどではなくなっていると見るチャイナウォッチャーもいる。更に中国政府が特に物流や貿易では香港よりも上海を将来の中国取引の窓口として育成することを優先していると市場関係者の中では見られており、それが香港の将来性に漠然とした不安を投げかけている。

勿論、まだまだ香港は中国企業にとって最大のオフショア資金調達市場であり、例えば最近でも中国工商銀行、中国銀行、中国建設銀行などが香港市場で相次いで上場しており、香港証券市場は中国銘柄で活況を呈している。

しかしながら、香港は1997年7月1日にイギリスから中国に返還後、50年間は現在の資本主義体制を維持していくことになっており、なんとしても2047年までは現在の繁栄を継続していく必要がある。その意味で、三菱東京UFJ銀行で提示された、香港の人民元オフショアセンター化構想は極めて興味深いものであった。中国政府にとっては人民元を完全な変動相場制とし、ドル、ユーロ、円などのような為替管理が極めて少ない自由な通貨として海外での取引でも用いられる通貨に育成していく動きはかなり遠い将来の課題と見られている。従って、まず香港においていわば実験場として人民元のオフショア市場の設立は中国にとってもメリットが大きいし、香港市場の発展にもつながるものである。



香港大学のメインゲートにて

4. 教員所感

学生たちの今回の現地調査の報告で興味深かったのは英語に関するものだった。「シンガポールの英語は所謂シングリッシュで訛りが強く、聞き取りづらかったけれど、香港の英語はわかりやすかった」『看板はシンガポールでは英語だけだが、香港は英語と中国語が併記してあった』ことにも注目した学生がいた。更に、「シンガポールは多民族国家で、英語を日常から生活で使用しており、英語圏といえるが、香港は英語が通用する地域だが英語圏とは言えず、英語は外国語にすぎない」との意見を言った学生もいた。特に、中国からの留学生にとっては、香港はやはり中国人の街だが、シンガポールは中国とは全く異なる街と感じたようで、それが英語の印象にも影響を与えたようだ。

学生たちはシンガポールと香港の英語の違いについて以上ように観察していたが、全員が同意見だったことはやはり英語は「世界語」であり、ビジネスには英語が絶対に必要であり、それがなくては今後の人生で大きく飛躍できないという点だった。そのことを学生が感じてくれたことだけでも引率責任者としてはとても嬉しかったし、今回の現地調査の大きな成果の一つだと言えるだろう。

英語に加えて中国語、特に北京語についても面白い発見をした。

訪問先、特にシンガポール大学での公式行事はすべて英語で行われたが、公式行事が終わり、Coffee Breakになると、シンガポール大学の学生と当方の中国人留学生は北京語で本当に楽しそうにコミュニケーションをとっていた。中国系シンガポール人が英語と北京語(プラス福建語)のバイリンガルであり、本学に留学中の中国人留学生とも心から親しく交流している光景を見るのはほほえましかった。一方で、中国系シンガポール人の福建語や香港人の話す広東語を北京、大連などの中国の北方からきた留学生全員が一言も理解出来なかったことは新鮮な驚きであった。中国でも北方出身の人にとっては福建語や広東語は全くの外国語であり、その意味でシンガポール人や香港人と大陸出身の中国人がコミュニケーションを取るには、北京語が中国圏の共通語となっているが、それは将に世界中の人々が国を越えて対話するときの共通語である英語のような働きをしていることも興味深かった。

今回公式な調査訪問以外で特に印象に残っているのは、シンガポールや香港などの中華料理店、喫茶店、ファーストフード店などでの留学生の反応だった。すべての店とは言えないが、多くの店の人は我々のグループは全員日本人の団体と思ったのか、サービスは決して良いとは言えず、時には高いメニューを無理やり薦められたこともあった。私自身は香港やシンガポールでの駐在経験や出張経験もあり、特段、驚かなかったが、同伴の中国人留学生にはショックの様子で、口々にこのような印象を語ってくれた。

「香港やシンガポールにある種の憧れをもっていた。確かに町並みは綺麗で近代的な都市だが、サービスやマナーには幻滅した。」、「やっぱりサービスやマナーはなんと言っても日本が最も素晴らしい。」

このような留学生の話聞いて日本について改めて考えさせられた。つまり、私たちは忘れがちだが、私たちが誇りに思い、未来にわたり大切にしていかなければいけないことは、物質的豊かさ、経済的繁栄、生活レベルの高さなどではなくて、日本人の生来有している礼儀正しさ、いたわりの心、他人への思いやりなどであること。そしてそのような点は外国人の目から見ても、日本人の素晴らしさであると感じていることである。現在私は幸いにして多くの学生、とりわけ多くの中国からの留学生を指導しているが、本当に留学生たちには教えられることが多く、常々自分たちの鑑であると感じている。



三菱東京UFJ銀行香港支店での説明会

5. 学生所感

帰国後、参加学生には全員調査結果のレポートを提出させたが、その中から印象に残った学生のレポートを最後に掲載する。書面の都合で多少割愛した部分もあるが、読者に学生の感想をストレートに感じてもらうため、明白な「てにをは」の訂正を除き、極力原文のまま掲載した。

未来社会創造学部 3年

呉 晓彤

9月1日、今回の金融事情現地調査の第4日目となりました。今日、香港証券取引所を見学する予定なので、胸がずっとときどきしています。

赤いベストを着ている従業員の行ったりきたりして忙しい姿が、スクリーンで現れている数字の変化につれ、みんなが喜んだり、深刻な顔つきになったりして、騒がしい画面がよく香港ドラマの中に出てきました。子供の私にとって、そのようなところが面白くて魅力的でした。その場所が香港証券取引所と呼ばれていることを知ったのは、1997年香港返還のころでした。しかし、風景が大きく変わりました。にぎわっている画面の代わりにパソコンとパソコンを見ている従業員の姿しか今では見えません。このような大きな変化には驚くと同時にもっと好奇心を持つようになりました。

この前、ゼミの研修旅行で大阪証券取引所を見学しました。そのとき、証券取引所について初めて勉強し、今回、香港証券取引所の変化についても理解するようになりました。それはインターネットの普及です。最初に株の売買は証券会社を通じておこなうことになるため、証券会社に口座を開設する必要があります。以前は証券会社の店頭に行って、申し込まなければなりませんでした。最近ではインターネットの普及により、ネットでの申し込みも急増しています。

今回の現地調査に参加するときも、自分の目で見、自分の頭で考えようと決めていました。今日、自分の目で、大きな変化を感じ、夢にまで見た場所を見れて本当に嬉しかったです。

香港証券取引所は入ると左側に大きな半円形のホールがありました。遠くからガラスを通してみれば、証券取引の現場だとすぐにわかりました。思った通りのパソコンの並びと従業員で、スクリーン

の上に激しく変化する数字が証券取引所の雰囲気を感じさせてくれました。

しばらくしてから、係員に質問しました。

「インターネットの普及によって、株式の売買が大体ネットで行われていると言われていますが、どうしてこんなに多くの従業員が取引の現場ではたらいていますか。」

その答えは、従業員は実は取引所のために働いているわけではありません。自分の顧客の代わりに証券の取引をしているとのことでした。

更に、香港証券の種類、中国株の取引概要、配当などについて、特に日本国内株式との比較で勉強出来ました。又、株式投資の楽しみ、株主優待、売買の流れについても、日本と香港では異なっていました。

夢の場所に行って、いろいろな勉強も出来ました。本当に有意義で充実した調査活動であったと思います。次にチャンスがあったら、是非参加したいと思います。